

連城三紀彦



虹の八番目の色

〈著者紹介〉

連城三紀彦 1948年名古屋市生まれ。早稲田大学政経学部卒業。78年「変調二人羽織」で幻影城新人賞、81年「戻り川心中」で推理作家協会賞、84年「宵待草夜情」で吉川英治文学新人賞、また同年「恋文」で直木賞を受賞。最近刊に『隠れ菊』がある。



虹の八番目の色

1996年4月9日 第1刷発行

著 者 連城三紀彦

発行者 見城 徹

発行所 株式会社 幻冬舎

〒160 東京都新宿区四谷1-22-6

電話:03(5379)8011(編集)

03(5379)8086(営業)

振替:00120-8-767643

印刷・製本所:図書印刷株式会社

検印廃止

万一、落丁乱丁のある場合は送料当社負担でお取替致します。小社宛にお送り下さい。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。定価はカバーに表示してあります。

©MIKIHICO RENJO, GENTOSHA 1996

Printed in Japan

ISBN4-87728-104-5 C0093

虹の八番目の色

装画／安西水丸
装丁／上原ゼンジ

第一章

1

押し寄せてくる黄色い波を刃でなぎたおしながら進んでいく。

今年四十八歳、終戦の年に生まれた一洋に戦争体験はないが、戦車の乗り心地はこんなだろうか
と、年に一度秋の最中にそう思う。

赤紙にとられ大陸に出征した父親は七十を越したつい去年まで、酔っぱらうと「中国はな、太陽
が真つ赤な塵ちりの中で大地を飲みこむように沈んでいくんだ」と自分のもう一つの祖国のように得意
げに話していた。一洋は信州の農家に生まれ、終戦直後の食糧難とも無縁に育っている。一洋にと
って戦争は歴史の教科書と仏壇の上の梁はりにかざられた叔父の軍服姿の写真と自分の名前だけだった。
一洋が生まれたのは終戦の二カ月前だが、父親はまだ日本が勝つと信じていて生まれてきた長男
の名にその夢を託したのだった。

その夢は八月十五日に砕け、父親の鈴木すずた太郎はさらに二十二年後、もうひとつ子供に託した夢を壊
されてしまうことになる。昭和四十二年の夏、大学四年生の一洋は長野の銀行に就職が内定した直
後、父親に自分はこの農家を継ぐつもりはないと宣言したのだった――。

黄色い波は次々に切りたおされて、地に伏していく……コンバインのモーターが青空にまで響か

せている音は機関銃の音と似ていないこともない。だが、この田圃たんぼでの戦いを戦争と呼ぶなら、何と平和な戦争だろう。倒れていくのは人ではなく、人の生命の糧かてとなる実った稲穂なのである。農業を大地との戦争とよぶなら、銀行員の道を選んだ一洋は落伍兵だったが、それでも年に一度稲刈りの季節だけは日曜日と年休をつなぎあわせて、この戦場に立つ。田植えや炎天下での散布とちがつて、稲刈りだけは黄色い嵐と戦うのがなかなかの快感であって、銀行の上司や威張った客の顔を一時でも忘れさせてくれる。

もつとも五年前、まだ高校在学中から『田沼鈴太郎』の夢を継いでいる一洋の長男の康彦やすひこなどは「父さんはマラソンレースの最後だけを代走してゴールを切って、『俺だつてちゃんと農業もやってる』と言い訳してるだけだ」と必ずこの時期、文句を言いだすのだが……。

今年の秋はそれでも、平和な戦車に乗りながら、いささか思ひは複雑である。去年の大晦日、酒に酔った父親が「俺ももう七十を過ぎたし、体も弱ってきている……そろそろ楽にさせてくれ」と言いながら、そのまま倒れこんだのである。ひと月の入院で何とか歩けるようになったが、どうもボケが始まりかけたらしい。この数年は力仕事は孫になる康彦に任せてしまっていたとはいえ、鈴太郎が太い大黒柱であったことに倒れられてやっと気づいたのだった。田畑の見まわりもできなくなった父親は、変に薄い背中だけが目だつようになつた。

陽は空の中心から、金色の雨を降りそそいでいる。一洋はちょうど田圃の半分を刈りとつたところで一息つくために稲刈り機をとめた。そして煙草を口にくわえた時、その奇妙な音が耳を破つたのだった。日ごろ職場で聞きなれたはずのその音が、見わたすかぎりの田畑の穏やかな秋を壊して

鳴り響いている。

それが銀行で使っている携帯電話のベルだとやっと気づいて、一洋はかたわらに脱ぎ捨てたジャンパーのポケットからそれを取り出した。昼御飯の用意ができたら連絡してくれと妻に頼んである。その連絡だろう、一洋は軽い気もちで電話をとった。

「あのう、用があるから……帰ってきて」

田圃のど真ん中に響く妻の郁子いくこの声は、いつもと変わらずゆったりとしている。

「親父おやじがどうかしたのか？」

母親は今朝から東京に出かけていて、父親の世話は郁子が見ている。

「お義父さんおとうは別に……ただ義母かあさんが」

「お袋がどうかしたのか」

「ええ、だから、ちよつと……」

「はつきり言えよっ」

思わずそう怒鳴っていた。そんな言葉で妻を叱るのは久しぶりのことである。妻の郁子は顔も体も肉というより綿をつめたようにふつくらとしているが性格も柔らかすぎて、反応が鈍い。若いころはよく叱ったものだが、いつかそれも慣れてしまった。

「ええ……だから家を出たみたいで……」

「家を出た？ お袋は東京だろう」

「それが、雪乃ゆきののそこには行っていないみたいで……さっき、電話があって自分はしばらく家に帰ら

ないが心配は要らないって……」

「しばらくって？」

「もしかしたらこのまま、二度と帰らないかもしれないって言ってたから死ぬまでって意味だと思
うけど……まだついさっき」

「言ってたってお袋が自分で電話をかけてきてそう言ったんだな」

「ええ……どこかわからない所から」

「馬鹿っ！ それならちゃんとした家出じゃないか。何故それを最初から言わないっ」

電話を叩きつけるように切つて、コンバインを跳びおりた。男の戦場という言葉ばかり気にして
いた一洋は、この田圃から二キロ離れた家が女たちの戦場であることをこの一年近く忘れていたの
だった。

「他に心当たりはないのか」

電話のメモ帳をテーブルの上に投げだし、そのついでのように一洋は革張りのソファに体を投げ
だした。親類一同のところへは全部電話をいれたが、どこも何も知らなかった。

「松本の綾子おばさんの所は？」

一洋の言葉に、

「行くわけないわよ。あそこへは——母さん、弟の梁次さんが死んだのは綾子のせいだって、綾子
おばさんが殺したみたいない言ひ方したんだもの、葬儀以来ずっと縁を切ってるし」

真つ先に自転車で駆けつけた一洋の姉の艶子^{つやこ}がそう答えた。自転車で十分ほどの雜貨屋に嫁いでいて、母親の行方がわからないという電話をいれなくとも、どのみち、昼過ぎにはいつも実家に戻つてきて、油を売っていく。

狐^{きつね}のような顎^{あご}の細い顔に狐目をしていて、事があるたびにその目をさらにつりあげ、大騒ぎをする。今も大げさな声のどこかがはしゃいでいる。母親の家出までが艶子にはワイドショーと変わらない面白い事件なのである。

「それより、郁子さん。本当に何も原因がないの？ 悪いけど、郁子さんはのんびり屋だから気づいてないだけじゃないの。母さんに何か変化があったこと……」

「さあ……」

と切れたゴムのように間延びした声で言いお茶をさしだした手をふと止めて、

「じゃあ、義姉^{ねえ}さんは？ 義姉さんだって毎日来てるんだし、義母さんに何かあったのなら私より、ご存じでしょうが……」

と言った。ゆつたりとした声で別段厭味^{いやみ}とも思えないのに艶子の顔色が変わった。

「郁子さん、あなた……私はただ、母さんが淋しいと思って。私がここへ顔だすのが不満だったら、なぜはつきりと言わないのよ」

「そんな、私はただ……義姉さんは私と違って重箱の隅にまでちゃんと目がいく人だから、私の気づかないことも気づいてるかと……」

弁解はさらに皮肉を重ねる結果になった。

「あなたねえ、そうやって自分でも気づかずに母さんを傷つけてたんじやないの。母さんは辛抱づよい人だからずっと我慢重ねて、それが突然爆発したんじやないのかしらね」

礫^{つぶて}のように投げつけた声を郁子はワテンポ遅れて受けとめ、綿の中にうまったような小豆^{あずき}の目をさらに小さくした。

一洋はそんな妻を可哀相^{かわいそう}だとは思わないでもないのだが、小姑^{こじゆうと}がそこまで言わないと怒っていることさえ気づかないほど鈍感なところも郁子には確かにあるのだ。もっともそんな綿をつめすぎた座布団のような性格だからこそ、勝気な姑となんとか二十五年うまくやってきたのだろうが、それだけにまた、溝もいつの間にか深まっていたのかもしれない。

家出？——しっかり者の母に何があつたのだろう。居間と廊下をへだてた広い座敷の天井には太い黒光りする梁がある。十年前、戦後二度目に家を建て直した時も残しておいた戦前からの梁を見あげながら、その梁そつくりの家を支えてきた母が、不意に家出したなど、一洋はまだ信じられなかった。

「本当にお袋は電話でそう言つたんだな」
何度も尋ね、そのたびに、

「……………ええ……………」

と首ふり人形のように頷^{うなず}くだけの郁子を見てみると、やはりこの嫁が原因かとも思う。

「……………でもお義母さん、明るい声でしたよ」

「お母さんは傷ついてるぶん元気な声出すのよ。私が電話に出たら、母さんに何が起こつたのかも

すぐに見抜けただろうけど」

郁子さんじゃねえ、という言葉は弟嫁に流した目で言った。さすがに自分が責められてると感じとつたらしく、郁子は居場所がなくなつたというように五十が近づいて太ってきた体を精いっぱい小さくし居間を出た。

と同時に、廊下で、

「おとうさんっ」

という叫び声が聞こえ、二、三秒の間において足音が騒がしく玄関へと走った。

「お義父さん、どこへ出かけるんですか」

玄関で郁子があげている声を聞きつけ、艶子は早くも走りだしている。

一洋が玄関に駆けつけた時はガラス戸を開けて外に出ようとする父親を、女二人が前後から押して必死にとめようとしている。

「お義父さん、出かけるならきちんとした恰好で——それに私が一緒にいきますから」

父親はネルの寝巻姿である。

艶子は芸能レポーターが突撃するように、「その恰好で出かけるというのは近くなんですね」

「行き先を言えないのは理由があると考えていいんですね」腕よりも声で押しまくる。

「母さんの所へ行くのに何が文句があるっ」

父親の痩せた体をつき破って声が爆発した。

「母さんが待ってるんだ。こんな恰好で行かせるつもりか。支度をしてくれ」

柩かまどにどつかと座りこんだ。

郁子はおろおろしながらも奥へ行き、艶子は「そう言えば大事な心当たりを忘れてたわね。母さんのことなら、父さんに聞くのが一番だというのに」ホッとため息をついた。

「親父、母さんの居所を知ってるんか」

直立不動——いや、座っているから直座不動か、出陣前の武士のように背筋をしゃんと伸ばした父親に、一洋はそう声をかけた。

父親はとがった顎でしっかりと頷いてから、

「母さんなら死んだ」

唐突とうとつにそう答えた。姉弟は顔を見合わせた。

「死んだって、どういうことだ」

「畑で蓮華れんげ草に埋もれて死んだ。蓮華の花がいっぱい……いっぱい……咲いた中で眠るように気持ちよさそうな顔で死んだ……」

父親の目は開いたガラス戸のむこうを……遠くを……果てしない遠くを見ている。一洋の目が届かないようなその遠くへと向けて、

「真つ昼間なのに畑が花の色で夕焼けみたいで……大地の方が夕焼け空でなあ、母さんは茜雲あかねに抱かれて本当に幸福そうに死んだ」

そう語り、ふつとその目を一洋に向けた。向けただけで、その目は一洋を見ていない。

「お前らがいかんだ。今朝も母さん、泣いっとたぞ。わがまま者ばっかが集まったこの家で何と

か頑張つてこれたのは父さんがいてくれたからだのに、その父さんがこんな風に倒れたら自分はどう死ぬほかないつてな。お前らが大切にせんからこうなつたんだ」

その声は、だが、一洋を咎めて^{とが}いるわけではない。目を開いたまま見ている不思議な夢にむけて淡い声でつぶやいているのだつた。

「あら私は母さんを大事にしますよ。嫁いだ後も毎日こうやって顔見に来てるし」

艶子があげた不満の声を制して、一洋は不安の目で父親の顔を覗きこんだ。

奥から戻つた郁子が「お義父さん、着替えるならこれに」とさしだした背広を、父親は驚^{おどろ}きに^めして三和土^たへと投げ棄^すてた。

「軍服だ。母さんという大切な戦友の死をこんな生つちよろい服で見送れるかつ」

そう怒鳴りつけた。体が怒りでぶるぶる震え、寝巻にさざなみが走つた。呆然^{ぼうぜん}としたのは郁子だけではない。一洋も艶子もひどく間延びした顔でぼんやりと父親を見守つた。母親の家出について父親にも家出をされたような気分だった。一人の男が長年住みなれた肉体という住処^{すみか}を離れ、不意にどっか遠くへ去つていつてしまった……。

「やつとお義父さん、寝ついてくれました」

奥の部屋から戻つた郁子が赤ん坊のことも言うようにそう告げた時には陽も大きく西に傾いていた。艶子は郁子の顔を見るなり、

「父さん、これで本当のボケじゃないの——これまでも饅頭^{まんじゅう}を二十個も食べたりそりや大変だった

けど何とか覚えはついてたから」

父親の世話は自分一人でやってきたと言わんばかりに大きなため息をついた。

「母さんのことがよっぽどショックだったのね。あんたたちがいけないのよ、騒ぐから。父さんの耳には入れちゃいけなかったのよ」

自分が一番かん高い声で騒いでいたくせに勝手なことを言う。一洋はそれを無視し、
「母さん、本当に今朝、泣いて愚痴を零こぼしてたのか、父さんに」

そう妻に聞いた。玄関先での父親の言葉の全部が妄想だとも思えなかった。

だが、聞くだけ無駄だった。郁子は、

「さあ、康彦と喋しゃべってるのは見かけたけど」

答えた後でゆつくりと首をかしげている。

「そう言えばヤツちゃんは？ 田圃？」

「俺が今日は代わりに稲刈りに出ると言ったから町に遊びにいつてる」

その返事も聞かず、艶子は掛け時計を見ると「やだ、もう四時半。晩御飯の支度しないと」慌あわてて立ちあがった。

「まあ死ぬなんて心配はないだろうから。昨日最後に見た限りでは元気だったもの。もっともその後で何かがあったら別ですけどね」

最後のあてこすりを弟嫁にむけて廊下を去っていった。一洋も時計を見た。今の田圃という言葉で、農協から借りたコンバインを放りっぱなしにしてあったことを思いだしたのだった。

西の山の端から夕焼けが赤い波のように押し寄せている。蓮華草というより石榴ざくろを割ったように茜色が雲を砕いて大地にまでなだれ落ちてゐる。二時間前の父親の言葉がこの夕焼けを予言したとしか思えず、一洋は畦道あぜみちでふと怖くなり足をとめた。

もちろん母親が田圃の中で死んでいるはずはない。茜色に染まった田の中に浮かびあがっているのはおき去りになった稲刈り機だけである。それでも一洋はしばらくその場を動けず、遠目でその機械を眺めていた。赤黒い夕もやにつつみこまれたその機械が荒涼たる夕日の戦場におき去りにされた戦車か地に臥ふした老兵を想像させた。母親の家出騒ぎのことも忘れ、一洋は煙草を一本吸い終えるまで、その機械に午後の父親の姿を重ねながら畦道に突っ立っていた。いや、それはただ父親の姿だけではなかった。さ来年は五十に手の届く自分の近い将来の姿にも見えた。広大な夕焼けはただ静かで、その端っこに小さく引つ掛かるように突っ立ちながら、一洋は今自分が機械を眺めているその目と、二時間前父親が果てしなく遠くを見ていた目が似ていると思っていた……父親……親父……田沼鈴太郎という一人の男……。

2

夜八時、東京から一洋の長女の雪乃が、夏に生まれたばかりの赤ん坊を抱いて駆けつけた。母親からは依然連絡がない。家を覆った秋の夜の静寂はそのまま母の無言だった。

「何もわざわざ帰ってこなくても……心配は要らん。大したことにはならんと思う」

一洋は半分は自分に言い聞かせて言った。

東京の会社員に嫁いでいる雪乃は「いいのよ。明日は土曜だし、今年は盆に帰れなかったから」スカーフを外しながらそう答えた。

「それにしてもこんなことで戻るなんて。本当に家出なんかしたの、祖母ちゃんか？」

「家出よ。この時刻まで帰らなきゃ家出よ。やっぱり警察に届けた方がいいんじゃないの。心当たりは全部搜しつくしたんだし」

亭主と二人の息子まで連れて出直してきた艶子が大桶の鮭さけの残りを頬ほばりながら言った。

「伯母さん、警察に届けたってそうすぐに搜索さくさしてくれるってわけじゃないわよ」

一時間ほど前に勤め先から帰ってきた美苗みななが言う。一洋の三人の子供の中では一番下で就職してまだ半年の現代っ子である美苗は、

「お祖母ちゃんもやるじゃないの」

とあっけらかんと言っていたのだが、夜も更けはじめてさすがに心配になってきたらしい。

「それにしても」と艶子が座敷に集まった一同の顔を見回し、「これだけの家族を作って背中にしよった母さんの人生はやっぱり大変だったろうよ。全部おっぱりだして棄てたいって気もちもわかるわね——そう言えば郁子さんは？　こんな時ぐらい先頭に立って喋しゃべってくれればいいのに。あれじゃ、心配してるのか、喜よろこんでるのか」とため息をついた。

「母さんならさつき駅へ見にいっただけで何もしないんじゃないか、帰っ

てこない気がするからって」

末っ子の美苗は日頃母親に反抗的でありながら、いざとなれば伯母より母親の味方である。ムツとした伯母は言葉を返そうとしたが、そのチャンスを奪うように、「康彦は？」雪乃が東京からの土産を妹にさしだして聞いた。

「町へ出たまま……仕方ないのよ。ヤス兄ちゃん、祖母ちゃんが家出したなんて想像もしてないだろうから。映画かそれとも……」

その返答の続きは表にわきあがった車の音である。康彦が帰ってきたらしい。

玄関が開き、すぐに足音が廊下に起こった。その足音がぴたりと止まった。

「どうしたんだよ」

襖の陰から姿を見せると同時に自分に襲いかかってきたたくさんの視線に康彦はとまどい、父親そっくりの太い眉を八の字に折って顔をしかめた。

「いや、康彦、実はお祖母ちゃんが……」

一洋が答えようとしたのをさえぎり、

「やめてくれ、こういうの！」

康彦は突然そう怒声を吐いた。

「やめてくれよ。なんで姉貴までわざわざ東京から……俺はただつきあってる彼女をちょっと紹介したいだけでまだ結婚なんてこと」

こめかみに青筋を立てているその顔を皆はきょとんとして見守っている。